

明治日本の中国窯業調査記 ——景德鎮の地理状況と製品輸送

郭 楠

摘要: 明治時代日本殖産興業政策実施の背景下, 明治政府对于当时清国の陶磁器業十分重視, 政府派遣日本調査員前往中国的瓷都景德鎮进行了详细的实地調査, 因此留下了许多关于清末景德鎮的調査報告, 根据明治时期日本の中国陶磁産業調査報告, 結合中国现有的相关史料, 来考察清末景德鎮の地理環境和瓷器制品の運輸狀況。

关键词: 日本調査 陶磁器業 景德鎮 地理 運輸

- 一 はじめに
- 二 明治日本の清国窯業調査記の概要
- 三 清国窯業調査記から見た景德鎮の地理状況と製品輸送
- 四 おわりに

一 はじめに

中日両国は古くから文化交流の歴史を有している。とりわけ世界的に“china”で象徴される磁器は、両国に共通する重要な文化の一部であることは周知の事実である。その中国磁器生産の中心地として著名な地は、江西省の景德鎮である。景德鎮の陶磁器は、宋・元・明・清を通じて中国の重要な輸出品とされ、遠く西アジア、ヨーロッパにも運ばれた。¹16世紀後半から19世紀初頭まで中国産の絹織物や陶磁器が、メキシコのアカプルコに運ばれ²、そこからヨーロッパにもたらされた。

これに対して、江戸時代において日本の有田磁器もオランダ船によって海外に輸出され³、さらに明治維新によって開国した日本は、輸出産業の振興をはかる一環として磁器の輸出も促進

¹ 三上次男『陶磁の道—東西文明の接点をたづねて—』岩波書店、1969年8月。三杉隆敏『海のシルクロードを求めて』創元社、1968年8月。

² 三上次男「メキシコの中国陶磁」、三上次男『陶磁貿易史研究』中、中央美術出版社、1988年3月、3-3-314頁

³ 永竹威「セラミック・ロードの開設」、永竹威『古伊万里の世界』ブレーン出版、1975年3月、164-169頁。

させた。⁴

その明治期の日本の陶磁器業界が、競争相手である清末中国の窯業に強い関心を持っていたことは看過されてきた。しかし19世紀末から20世紀の初頭にかけて日本から中国の窯業調査に派遣された人々の記録が幾点か残されている。

そこで本稿は、日本の陶磁業の関係者が記録した清国窯業調査記録に見られる景德鎮窯業に関連する記事をもとに、清末中国の景德鎮の地理状況や、当時の景德鎮の磁器製品がどのように輸送されたかについて検討したい。

二 日本の清国窯業調査報告の概要

明治期の日本は殖産興業による産業の育成を図るため様々な分野の産業に着目し、とりわけ海外製品との競争に対応すべく海外調査を行っている。⁵その中には窯業もあった。

中国の窯業調査から帰国した直後の北村の報告の一部分が、当時の神戸の有力紙であった『神戸又新日報』に掲載されている。神戸は、横浜・上海航路の寄港地の一港⁶で、北村は、帰国の際に神戸で下船した時に記者からインタビューされたのであろう。

『神戸又新日報』第7520号 明治40年(1907)6月14日付の「清国の陶磁器」に以下のようにある。

去三月命を受け窯業視察の爲め渡清し此程帰朝したる東京工業試験所技師兼農商務省 技師北村弥一氏の談に曰く、南清の陶磁業を調査し佛山より石湾に赴きしが同地は建築用陶器植木鉢等を産し年額五十万にして大部分は香港に送り、其他広東に送る分は素焼の食器にて同処に於て絵付を爲し、米国等へ輸出せるが著るしき進境を認めず。次で福建省に到り徳化の窯業を觀る。同地の産額は十万円位にて、其得意先は省内の外、台湾新嘉坡なりしも台湾は日清戦後我版図となりし爲め近年に至り全然輸出杜絶となれり。又徳化の産品中には我伊豫の戸部焼と類似せるを以て同品輸入多く同地に赴ける邦人にして戸部焼きを徳化産と誤認して購求する者尠からずと聞く兎に角徳化の窯上には草茫々たる有様にて現状にては頗る振はざるに驚くと共に分業の極端迄行はるるには驚きたり。分業の結果景德鎮にては窯数七十に過ぎず。然るに我瀬戸の如きは産額少くして、尚且つ百十数の窯を有せり。随つて一年に十回使用するに止まるものすらありて、之に由つて生ずる不利益に尠からず。景德鎮は注文毎に開窯するを以て毎に火氣あれば燃料を節約すること大なり是れ

⁴ 小山富士夫「明治大正のやきもの」、小山富士夫『日本の陶磁』中央美術出版、1962年8月発行、1964年6月四版、201-204頁。

⁵ 角山榮編『日本領事報告の研究』同文館、1986年12月、10-39頁。

角山榮『『通商国家』日本の情報戦略 領事報告をよむ』日本放送出版協会1988年9月。

⁶ 松浦章『汽船の時代1 近代東アジア海域』清文堂、2013年3月、1-16頁。

邦人の学ぶべき所ならん。清国の陶磁器製造方法進歩せざるにも拘はらず、労銀頗る低廉なるは独逸製品の隋処に散見すると共に当業の注意すべき点なるべし。本邦輸入陶磁器は戦後非常の好況にして現に三十三年中大阪税関を経て輸出せし陶磁器は一万円に過ぎざりしが、三十九年は七十二万円に上り殆んど全部は支那人向輸出に係れり。目下南清に於ては美濃尾張の当業者出張し販路拡張に力めつつあれど稍着手晩かりしは遺憾なり。又我当業者は安物のみを輸出し、清国人をして本邦陶磁品の真価を誤認せしめたる傾あるを以て将来は是等の点に於ても思を致さざるべからず。⁷

北村は、日本政府の命を受け明治40年(1907)3月に清国へ渡航し、清国南部の広東、福建のみならず、景德鎮等の窯業を視察し帰国したのであった。各地の製品の製造行程やその特色など詳細に調査している。その詳細な報告書は、明治41年(1908)に農商務省商工局から出版された『清国窯業調査報告書』⁸であろう。そうすると『神戸又新日報』の記事に見える「北村弥一」は北村弥一郎の誤りであることは明かである。北村の記事が神戸の新聞に掲載された背景には、北村彌一郎が上海から日本郵船会社の汽船に搭乗し帰国し、神戸で下船したためと思われる。

このような北村彌一郎の他にも幾人も調査を行っていたが、これまでほとんど注目されることはなかった。明治末期の日本人による中国窯業を調査した記録には管見の限り次ぎのものがある。それらを一覧表にした。

1900-1908年中国窯業調査一覧

番号	中国窯業調名	調査機関・発行所等	出版年
1	清国景德鎮磁器視察報告 ⁹	農商務省商工局臨時報告書	明治33年(1900)
2	清国陶磁器産地視察報告書 ¹⁰	農商務省商工局臨時報告書	明治33年(1900)
3	清国窯業視察復命書 ¹¹	農商務省商工局臨時報告書	明治34年(1901)
4	清国ニ於ケル陶磁器業 ¹²	農商務省商工彙報	明治39年(1906)
5	清国景德鎮ニ於ケル製陶業 ¹³	農商務省商工彙報	明治40年(1907)

⁷ 『神戸又新日報』第7520号、明治40年(1907)6月14日付の「清国の陶磁器」。

⁸ 農商務省商工局『清国窯業調査報告書』農商務省商工局、1908年3月。同書の冒頭に「本編ハ明治四十年一月農商務省技師北村彌一郎清国ニ渡航シ、同年五月ニ至ルノ間、彼ノ地ニ於ケル窯業ノ状況ヲ實査シ報告セル所ニ係リ」とあるように、明治40年(1907)年1-5月の中国窯業調査の報告である。

⁹ 『農商務省商工局臨時報告』第3巻、ゆまに書房、2002年2月、107-133頁。

¹⁰ 『農商務省商工局臨時報告』第3巻、ゆまに書房、2002年2月、134-143頁。

¹¹ 『農商務省商工局臨時報告』第7巻、ゆまに書房、2002年2月、481-506頁。

¹² 『農商務省商工彙報』第3巻、ゆまに書房、2003年1月、183-194頁。

¹³ 『農商務省商工彙報』第4巻、ゆまに書房、2003年1月、211-225頁。

6	清国ニ於ケル陶磁器業 ¹⁴	農商務省商工彙報	明治41年(1908)
7	清国窯業調査報告書 ¹⁵	農商務省商工局	明治41年(1908)

以上7件の調査報告が知られる。次にその調査の概要を述べたい。ただし報告書名は表1の番号で示す。

1は、京都市陶磁器試験所長であった藤江永孝が明治31年(光緒24、1898)10月に調査の依頼を受けて11月23日から30日までの7日間にわたって、景德鎮窯業を調査したものである。その内容は、景德鎮の地理的状況、営業組織と規模、職人の賃金や労働条件、原料や燃料、製陶方法、色つけ、輸送方法、官窯、製品の状況、調査者の私見と輸出地などについて報告したものである。

2は、藤江永孝が明治31年(光緒24、1898)10月に調査の依頼を受けて10月15日から12月21日までの68日間にわたって、清国磁器産地を調査したものである。その内容は、景德鎮製磁業の概況、宜興焼の概況、石湾製陶業の概況、広州府の焼附業の紹介、同時の磁器の販路拡張の方針などについて報告したものである。

3は、瀬戸陶器学校長であった黒田政憲が、明治34年(光緒27、1901)2月に調査の依頼を受けて2月6日から4月22日まで、上海、景德鎮、九江と漢口の磁器業を調査したものである。その内容は、陶磁の上海磁器商店で販売されていた中日磁器の紹介、景德鎮の磁器製造戸数及び職工数などの調査、景德鎮の窯の構造、立て方、造価窯数の調査、原料燃料や釉薬、職工の技術、工場組織と制作方法、磁器販売方法、運び方や荷造り、九江と漢口の磁器商店、漢口の石膏、日本磁器と清国磁器の比較及び清国磁器の前途、風俗人情と陶磁器の需要の関係、日本磁器の海外市場に対する私見について報告したものである。

4は、農商務省商工局が編纂した農商務省商工彙報(明治39年(光緒32、1906))に記載された清国陶磁器業に関するものである。その内容は、製陶地景德鎮の概況、長江流域の陶磁器の貿易や運賃、税金、会館との関係、日常使用の磁器、将来日本陶磁器の改良などについて記載している。

5は、在清国海外実業練習生であった石黒秀久が、農商務省商工彙報(明治40年(光緒33、1907))において清国景德鎮の製陶業について報告したものである。その内容は、景德鎮の地理位置、原料や製造方法、製造技術、産出期、窯、中日の磁器の比較、日本磁器の進路などについて報告したものである。

6は、在上海海外実業練習生の石黒秀久が、農商務省商工彙報(明治41年(光緒34、1908))で清国向けの日本品及び用途価格について報告したものである。その内容は、同時の中国人の

¹⁴ 『農商務省商工彙報』第6巻、ゆまに書房、2003年1月、241-258頁。

¹⁵ 『明治後期産業発達史資料』第246巻、龍溪書舎、1995年2月、1-140頁。

使った美濃焼、愛知県の瀬戸焼、会津焼、淡路焼、万古焼、九谷焼、出雲焼、博多人形、製品の形状と種類、値段などについて詳細に報告した内容である。

7は、明治40年(光緒33、1907)に、農商務省技師であった北村彌一郎が同年1月から5月まで清国窯業について視察した報告である。その内容は清国人と陶磁器の関係、清国陶磁器産地と輸出額、景德鎮の陶業概況、徳化陶業や石湾陶業、清国でのヨーロッパ産磁器と本国磁器、主な通過都市、陶磁器に対する個人意見、ガラス業や煉瓦業に対する私見、そして清国瑛瑯鉄器の概況などについて報告したものである。

次にこれらの調査記録を参考に、清末の景德鎮の地理状況と製品運輸について述べたい。

三 清国窯業調査記から見た景德鎮の地理状況と製品輸送

1) 日本人の見た景德鎮の地理状況と製品輸送

景德鎮は、江西省東北部に位置し、西北は安徽省東至県、南は万年県、西は鄱陽県、東北は安徽省祁門県、東南は婺源県と接する。気候は亜熱帯性で降雨に恵まれ、気温は温和である。周囲は山々がめぐり、河川も多い。鄱江の支流、昌江が流れている。この水運の要である昌江については1913年から1915年の間に調査した上海にあった東亜同文書院の記録によると次のようにある。

昌河は源を安徽省南部に発す、即大洪司よりする南港(大洪水)は南流し祁門城南に於て西流し来る双溪を合せ、南西に向ひ、江西省界に近く大北水を合し、江西に入り小北港にて櫟根嶺より来る小北水及良禾嶺より来る良禾水の合流せるものと相会し、水量大に増加し、更に南下して北斗溪を合せ、舊浮梁県城の対岸に番源水の注ぐあり、景德鎮(浮梁県城)を過ぎ西流し饒州に於て鄱陽湖に注ぐ。¹⁶

この記述に見る「昌河」は、現在の昌江であり、昌江の源流は安徽省南部にあり、安徽省の祁門城南を経て西の小河川と合わせ、南西に向き、江西省界の近くにおいて大北水と合流し、江西櫟根嶺より来る小北水および良禾嶺より来る良禾水と合流し、水量を増し、さらに南下して北斗溪とも合流して、もとの浮梁県城の対岸の番源水に入り、そして饒州において鄱陽湖に注ぐ川の流れであった。

京都市陶磁器試験所長であった藤江永幸もこの情景を眼にしていた筈である。彼は明治31年(光緒24、1898)に、明治政府から清国窯業実況調査の嘱託を受け、復命書としての「清国景德鎮磁器視察報告」に、景德鎮の地理交通と周辺の人々の様子の一端を記録した。

景德鎮へは、京都陶磁器試験所長藤江永幸氏と同行し、其順路は上海より揚子江を遡り九

¹⁶ 『支那省別全誌』第11巻、東亜同文会、1918年12月、260頁

江まで四百五十里は蒸汽船通じ、九江より饒州府迄は清暦四、五、六の三ヶ月間水多き節のみ小蒸汽船往復し、其前後は舊来の河船、若くば陸路なるが、清国内地の陸路は非常に困難なるのみならず、土民の排外熱甚だ強さを以て、当局の保護を受けざれば危険にて、今迄外国人に対し幾回も其例わりし由に付、生等は九江道台へ出頭し、内地河船旅行の手続きを終へ、十一月十二日河船一艘を雇ひ、船夫九人、通訳一人、小使二人都合十四名乗り込み、鄱陽湖を経て鄱陽河を遡り、二十日饒州府へ着(九江より船路三百六十清里)。茲より上流は河幅狭く、水底浅き為、小船に乗り替、百八十清里上りて、廿三日の夜、舟は景德鎮の河口へ着した。¹⁷

この記述から、藤江永幸一行等の通行経路は、当時における景德鎮の交通状況を明らかにしている。この行程の順路を整理すれば次のようになるであろう。

上海から450清里の間は汽船を利用して長江を遡り、九江に到着した。毎年四、五、六月の3箇月は雨季のため水量が多く、九江から饒州府まで小汽船で往復が可能で、かなり便利であった。しかし陸路の通行は非常に困難であった、それには二つの理由があった。一つは清国内地の陸路交通が十分に発達してないこと、もう一つは民衆の排外意識が強かったことである。藤江永幸一行は清国政府の保護を受け、鄱陽湖を経て、鄱陽河を遡り、ついに饒州府へ到着した。しかしさらに上流の水底は水深が浅く、小船に乗換、十一日をかけて、ついに景德鎮の河口に到着している。

この経路こそ、藤江等の順路を逆にした行程は当時の磁器製品の輸送経路と考えられる。

景德鎮の位置に関する記録として、1900年の藤江永孝の現地調査である「清国景德鎮磁器視察報告」に以下のように記されている。

景德鎮ハ江西省饒州府浮梁県ニアリ。古昔所謂天下ノ四大鎮ト處ニシテ前 時ニ在テハ頗ル繁盛ノ土地ナリモ、今ハ反テ人口及ビ戸数ヲ減ゼシト云フ。左レバ之ニ伴ヒ其陶磁器業モ比較的ニ幾分カ衰頽ニ側キシヲ免レズ。市街ハ一面ハ鄱陽湖ニ瀕シ、此河ヲ遡ル百八十清里ニシテ、安徽省祁門ニ達スルヲ得。又下流百八十清里ニ饒州府アリ。其ヨリ鄱陽湖ヲ越ヘ長江ヲ出デ、九江ニ達スルノ間凡ソ三百六十清里ニシテ、其間運輸ノ便極メテ宜シトス。又一面ハ小丘ヲ負ヒ、南北ニ長、東西ニ短シ、戸数凡ソ三千内外ナリト云フ。街巷極メテ狭隘不潔ナル、敢テ他地方ト異ラズ。是ヲ一見スルニ磁器ノ商店、絵附店、工場等甚ダ多クハ直接間接磁器ノ為メ生活シ居ルト云フモ不可ナキガ如シ。其人質剽悍ニシテ人ニ慣レ易カラズ、殊ニ他地方ヨリ陶工トナリ移住シ居ルモノ甚ダ多キヲ以テ比較的幾分カ粗暴ナリト云フ¹⁸。

¹⁷ 『農商務省商工局臨時報告』第3巻、ゆまに書房、2002年2月、136頁。

¹⁸ 『農商務省商工局臨時報告』第3巻、ゆまに書房、2002年2月、111頁。

と述べているように、景德鎮は江西省饒州府浮梁県に位置し、鄱陽湖に面して、上流は安徽省の祁門、下流は饒州府であり、鄱陽湖を越え、長江を出で、交通運送は非常に便利であり、広東省の佛山、湖北省の漢口、河南省の朱仙鎮と並び天下四大市鎮として有名な鎮の一であった。古くから繁栄しているところであったが、1900年頃には人口及び戸数の減少が見られ、陶磁器業は衰頹する状況になっていた。それでも陶磁器の工場や商店が多く存在し、当地の人々の多数が陶磁器業に従事していた。その製品の多くは水運を利用し、鄱陽湖を越え、長江に出て九江に到着するまでの約360清里間の水運による運輸は非常に便利であった。

藤江永幸は、「清国陶磁器産地視察報告書」に景德鎮の地理と資源については次のように記録している。

景德鎮は清国一等の磁器製造地にして、上海を距る西南凡そ千五百清里(一清里は日本の凡六町)。江西省饒州府浮梁県に属し、浮梁公署饒州府分府景德司を重なる官衙とし戸数凡ソ二千余なり。此地鄱陽河に面し河を隔て、西に小山あり河は北より南に流れ東は数町を隔て、小山あれども皆秃山にして樹木なし、故に燃料(松割木)は二百清里の下流より取寄せ、亦素地釉薬等の原料も同地に産出せずして、近くは四五十清里、遠くは二百清里以上の地より取寄せるを以て是等は何れも産地に於て水簸し煉瓦の如き形に乾し固めて供給せり故に自然斯の如き分業法を成り居れり。¹⁹

つまり1900年において、景德鎮は普通に第一の磁器生産地の地位を保持し、上海との距離はおおよそ1,500清里、江西省の饒州府浮梁県に属し、戸数は約2,000であり、南北に流れる鄱陽河に面し、西は山に囲まれ、東は村里が形成されていた。しかし山はほとんどが秃山であった。その理由は大量の陶磁器焼成のため、開窯の時の燃料として松柴が大幅に使われ、樹木は少なくなっていた。そのため200清里以外の下流から伐採し輸送してきた。燃料だけでなく、釉薬の材料も遠くから取り寄せていた。この記録からも清末の景德鎮磁器業における自然資源の開発と利用の状況は厳しい状況にあったことがわかる。

東亜同文会が編纂した『支那省別全誌』の江西省誌の景德鎮の水路および陸路交通について次のようにある。

源を安徽省祁門県下に発する昌河は諸支流を合し当地に到れば幅一町餘深さ一丈餘あり、上は祁門迄舟を通ずべく、下は饒州迄大型民船を通ず、此間百八十支里、一日乃至一日半にて達すべし、下航船は陶器類を積載し、復航には多く雑貨を運来す。碼頭の長さは十支里餘に亘り、其中部より上は祁門方面との間を来往する小舟、饒州方面との間を航行する大型民船の停泊に當つ、而して調査当時(大正二年)停泊せる民船を計算したるに中部より上に三百九十隻、下に千百三十隻、尚対岸に百三十隻あり、合計千六百五十隻の多

¹⁹ 『農商務省商工局臨時報告』第3巻、ゆまに書房、2002年2月、134頁。

きに上れり、如何に水運の発達せるかを伺ふに足らん。陸路交通機関としては小車及挑夫あり、小車は多く米の運搬及び旅客の用に供せらる、里市渡に於て午後三時より十分間に出入せる小車及挑夫を算したるに、入市せる小車二輛、挑夫三、出市せる挑夫八ありき。²⁰

景德鎮の磁器製品の運輸は、昌江を利用し、上流の祁門から下流の饒州までの間約180里の距離は一日半で到着が可能であった。昌江は各支流と合わせ景德鎮に流れつくと、深さは一丈、約3.03mとなり、そこから上流の祁門までは小船による通行ができた。下流の饒州までは大型民船の通行が可能であった。船舶に積載される貨物は、陶磁器製品だけでなく、磁器以外の雑貨もあった。埠頭の長さは10支里あまりであり、調査によると、そこに停泊していた小船と大型民船の隻数は、合計約1,650隻であったとされる。しかし水運だけの利用ではならず、陸路もかなり利用された。陸路の交通手段は、小車と挑夫であり、当時の日本人調査員は、当時午後3時における出入する小車と挑夫の数量を数えている。

景德鎮の水路交通と陸路交通の利用状況についてさらに『支那省別全誌』の江西省誌に、

昌河を上下する民船は城下に泊するも馬頭の築かる々なく、沙濱に三、五止まるに過ぎずして此地にては水運を利用すること少し、景德鎮に到るには水陸二路あり、貨物は水路に依り、旅客及小貨物は陸路に依るもの稍多し、交通機関としては小車あり、上海地方に於けるものより稍小なり。²¹

とあり、景德鎮に到着する交通路には水路と陸路があり、一般的な貨物は水路を利用し、旅客および小型の貨物は、陸路を利用するのが多かった。その交通機関としては小車である。つまり景德鎮の交通は水路だけでなく、陸路もかなり利用されていたが、陸路による輸送は小型の運搬車が殆どで、大量輸送は水運が圧倒していたことは明かである。

また東亜同文会が編纂した清国経済状況を中心に調査した『支那経済全書』には、景德鎮陶磁器製品輸送の荷造り費用について、次のように記録している。

荷造費用ハ代価総計ニ対シ百分ノ七、五ヨリ十即チ一割二至ルト云フ。其法ハ藁十数本宛ノモノニ把ヲ採リ、其両端ヲ結ビテ一條トナシ、之ト同じ條ノ藁ヲ採リテ、十文字ニ組ミ、飯碗四十個宛ヲ一重トナシ、其飯碗各個ノ間ニハ何物ヲモ敷カズ、直ニ纏結シテ一束トナス。小茶碗、大井、皿ノ如キモ皆此法ニテ結束スト云フ。而シテ此等ノ結束シタルモノハ、一ノ籠様ノモノニ藁ト共ニ詰メ、之ヲ竹條ニテ横縛リヲナシテ輸送ス。斯ク荷作ハ粗忽ナルガ如キモ、破損ナシト云フヲ以テ見レバ、其原因ハ素地ノ堅固ナルニ因ルト、一ハ籠ノ柔軟ナルニ由ランカ。荷造ニハ日雇一日三十銭、酒錢十銭ヲ以テ、運賃ハ非常ニ低廉ナリ。

²⁰ 『支那省別全誌』第11巻、東亜同文会、1918年12月、27頁。

²¹ 『支那省別全誌』第11巻、東亜同文会、1918年12月、87頁。

ここには景德鎮磁器の製品の輸送形態が記されている。破損しやすい磁器製品をいかに大量に破損することなく輸送するかの工夫が描かれている。その製品を破損すること無く荷造りしていた、藁綱を上手く利用して食事用の碗や茶碗そして大皿などを重ねて包装していたのである。その包装したものをさらに竹籠に入れて破損をふせいだ状況が具体的に記されている。

農商務省技師北村弥一郎が清国に渡航し、明治40年(1907)1-5月までの清国における窯業の状況を実査し、報告した中に景德鎮の位置地勢に関する内容は次のようである。

景德鎮ハ江西省饒州府浮梁県ニ属スル都会ニシテ、四面丘陵ヲ以テ、囲マレ其西辺ハ浮梁河ニ瀕セリ、該河ハ景德鎮付近ニ於テ景德鎮河ノ名ヲ取り、北ヨリ南ニ向テ流レ而シテ下流ハ景德鎮ヲ距ル数丁ノ地点ニ於テ一支流ト合シ其会合点ヨリ曲折シ、西南ニ流下スルコト百八十清里ニシテ鄱陽即饒州府ニ至リ楽平河ト合シテ鄱陽湖ニ入り、依テ以テ中清ノ大動脈タル長江ニ通ズルモノトシ、其上流ニハ数十清里ニ浮梁アリ。又百八十清里ニシテ原産地ノ一ナル安徽省祁門ニ達セリ。景德鎮ノ運輸交通ハ一ニ此河ニ依ルモノトシ付近ニ産出スル原料ノ一部ヲ除クノ外ハ燃料ニ製品ニ悉ク此河ニ依テ運搬セラル。苟クモ景德鎮ニシテ浮梁河ナカラシカ陶磁器製造地トシテノ資格ヲ失フニ至ル可ク、浮梁河ハ実ニ景德鎮ノ命脈タリ此主要ナル河流ハ春期ニ在テハ河水満々トシテ、全幅ヲ覆ヒ舟行頗ル便ナルモ秋期ニ在テハ河水減少シ殊ニ清曆九、十両月即我十、十一両月ノ頃ハ減水其極ニ達シ、河底ハ殆ド其全部ヲ暴露シ只中央ニ僅カニ単舟ヲ通ズルニ過ギザルー一条ノ細溝ヲ残スニ過ギズシテ、運輸頗ル不便ヲ極ムト云ヘリ。²³

ここに掲げた記事の前半部分についての景德鎮の地理的状況は上述の調査とほぼ同様であるが、後半部分が重要である。その内容は、景德鎮の交通運輸は浮梁河に依存しており付近から産出する原料や燃料は全てこの河を利用して運送されていたこと。かりに景德鎮に浮梁河が無かったら、陶磁器生産地としての資格は失うとまで言っている点である。つまり浮梁河が景德鎮にとっての命脈であったのである。そして浮梁河は春期に増水し、舟の通行が非常に便利であったが、秋期とくに九、十月には減水し河底が見えるほどであり、水運運送には非常に不便であったことを指摘している点である。

このように明治期の日本人は、景德鎮の地理的状況を明確に把握し、とくに磁器製品の大部分が水運運送によって消費地に搬出されていたこと明確に知られる

2)中国の記録に見る景德鎮の地理状況と輸送状況

それでは上記の明治日本の調査記録に対して中国の記録にはどのようなであろうか。まず清嘉

²² 『支那経済全書』第12巻、東亜同文会、1908年11月、363頁。

²³ 『清国窯業調査報告書』第246巻、龍溪書舎、1995年2月、13頁。

慶期の藍浦の『景德鎮陶録』巻一に見える景德鎮の地理的状況から見てみたい。

景德鎮属浮梁之興西郷。去城二十五里。在昌江之南。故称昌南鎮。其自觀音閣江南雄鎮坊。

至小港嘴前後街計十三里。故又有陶陽十三里之称。水土宜陶。陳以来土人多業此。²⁴

と記しているように、景德鎮は浮梁縣の西方の郷村であり、昌江の河畔に位置していた。土と水に優れた地理的条件を備えており、そのため六朝時代の陳朝以降においてこの地で陶業が開始されたとされている。

1920年代の中国の調査記が『申報』第20066号、1929年1月26日付の鄧負盒著「景德鎮之瓷業（一）」に見られる。

景德鎮屬於江西之浮梁縣、故景德鎮瓷又名江西瓷、中國製瓷之地、初不限於江西景德鎮一處、福建之德化、河北之磁縣、湖南之醴陵等、莫不產瓷、而製品之量、品質之佳、皆不及景德、即外國製品、品質亦遠遜於景德、此景德鎮瓷、所以冠甲世界也、

景德鎮、去民國紀元前約九百餘年、宋景德年間、始於此置鎮、製瓷則遠在景德年間以前、厥後製瓷技術漸次進步、業務亦漸次發達、至有明而大、宣德・成化年間、出品精良、萬曆年間、釉上五彩、最爲著名、清康熙年間、則盛極一時、嗣以太平之亂、事業大衰、現今雖有挽回之勢、然技術不及曩昔遠矣、

景德鎮、江西浮梁縣之大市鎮也、四面丘陵環繞、居昌江（浮梁河）之南、故又名昌南鎮、而景德鎮附近之河流、又特名之曰景德河、沿河上流二十五里達浮梁縣、下流里許、與一支流會、屈折西南流一百八十里抵鄱陽、與藥平河合流入鄱陽湖、而匯通長江、景德鎮之運輸、悉賴是河、春水漲時、舟行頗便、秋水枯竭、則感困難矣、

景德鎮於北緯二十九度、氣候和、積雪最多之時、亦僅寸餘、街市頗繁盛、閉塞期間、人口約十餘萬、開塞期達三十萬、是鎮住民、直接間接、與瓷業皆有關係也。²⁵

とあるように、中国の磁器生産地は景德鎮だけではなく、福建省の德化、河北省の磁県、湖南省の醴陵なども磁器を生産していたが、磁器生産の量と品質の良さにおいて景德鎮には及ばなかった。さらに海外の磁器製品の品質も景德鎮より見劣し、景德鎮の磁器生産は世界一と見られた。景德鎮は宋の景德年間に鎮となったが、それ以前から磁器生産が始められていた。景德鎮の歴史の流れには輝かしいものがあつた。しかし太平天国の影響を受け衰退し始めた。1920年代当時には少し上向いたが、その技術は昔の程度にはもどれないでいた。とりわけこの鄧負盒の述べた中に景德鎮の陶磁器製品の運送に関する重要な指摘がある。景德鎮は江西省浮梁縣の大市鎮であり、四方は山に囲まれ、昌江（浮梁河）の南に位置し、それにより、昌南鎮とも言われた。景德鎮付近の河川はすべて景德河と呼ばれ、これらの河川の上流は浮梁縣であり、

²⁴ 『景德鎮陶録』文海出版社、1969年8月、24頁。

²⁵ 『申報』第254冊、上海書店、1983年12月、701頁。

下流数里のところでは支流と合流し、西南方向に 180 里ほど流れて鄱陽につき樂平河と合流し鄱陽湖へ、ついで長江に入っている。景德鎮の運輸はすべて河川の水運に依拠しており、春は増水するため船の通行は便利であるが、秋には減水するため水運は不便であったとされる。

江西省軽工業庁陶磁研究所の 1950 年代の調査に基づく『景德鎮陶磁史稿』に昌江について詳しい説明が見られる。

景德鎮処昌江中游，上溯至祁門二百七十華里，下流至鄱陽一百八十華里。在鎮附近有昌江支流三：(一)東河。(二)南河。(三)西河。東河發源于浮梁東鄉之東源山，全長一百二十華里。春夏可行木船，秋冬可通木筏。東河經瑤里、界首、鵝湖、王港、高砂等瓷器原、燃料產地，由浮梁舊城注入昌江。南河發源于婺源西南山中，全長九十華里，常年可通木船、木筏，經浮梁南鄉之程村，東流、湘湖、湖田為瓷器原、燃料產地，由景德鎮市南郊之南山下流入昌江。西河發源于安徽至德縣，全長約一百華里，經浮梁北鄉之札門、港口、大洲、三龍等瓷器原、燃料產地，由景德鎮中渡口流入昌江。²⁶

景德鎮の周囲は山に囲まれ、交通条件はかなり厳しく、山に囲まれた中に景德鎮が位置していた。その一つの河川が昌江である。昌江は東河、南河、西河と三つの支流があり、東河の源流は浮梁縣の東部の山、南河の源流は婺源の西南の山、西河の源流は安徽省の至徳県である。これらの支流の水運を利用して磁器原料、燃料などが輸送されていたように、水運は昌江に依拠していた。昌江の上流と下流いずれも季節により減水・増水が見られた。景德鎮はこのような厳しい運輸条件のもとで磁器業を発達させてきたのである。

さらに『景德鎮陶磁史稿』に景德鎮の水路運輸の記事が見られる。

小帆船必須走过一百八十華里到了饶州（鄱陽）以后，才能搭上比较大的帆船，这就叫做过驳。过驳以后，才经过鄱陽湖出長江，把瓷器运到全国各地。这是没有轮船以前的情形。有了轮船以后，也只能在饶河行驶，任旧是由景德鎮用小帆船把瓷器装到鄱陽、在鄱陽再用小轮拖到九江出口。这又限于春夏水满，到了秋冬水涸，小轮船也不能在饶河行驶。景德鎮的瓷器又必须由帆船运到距鄱陽六十華里的龍口（鄱陽湖口），在龍口又須用小划子过驳，再上大帆船，到猪婆山后（鄱陽湖中），方可用小轮船拖运到九江出口。²⁷

この記事は、景德鎮の磁器製品の輸送方法及び経路を紹介している。汽船が無い時代において磁器製品は、小型帆船で饒州へ運び、同地で大帆船に積み換えた。それを「過駁」と言われた。過駁した後、鄱陽湖を経て長江に入り全国各地に運輸された。汽船が登場した時代にも同じ状況であり、小型帆船を利用し饒州において小型汽船に積み換え九江へ運ばれた。しかし減

²⁶ 江西省軽工業庁陶磁研究所『景德鎮陶磁史稿』生活・読書・新知三联書店、1959年2月、29頁。

²⁷ 江西省軽工業庁陶磁研究所『景德鎮陶磁史稿』生活・読書・新知三联書店、1959年2月、30頁。

水季には小型汽船では饒河を通行できず、帆船を利用して鄱陽湖口で過駁し、そこから鄱陽湖を航行する小型汽船に積み換えて九江に到着したのであったことが知られる。

四 おわりに

19世紀末の日本人の記録した景德鎮に関する記録から景德鎮の地理的状況と磁器製品の輸送の状況を見てきた。とりわけ上海東亜同文書院第十三期学生の実地調査において、昌江の流れや景德鎮の磁器製品の運輸経路、さらに水路と陸路の利用比率などの詳細な記録が見られるのである。

京都市陶磁器試験所長であった藤江永幸は、「清国景德鎮磁器視察報告」において景德鎮の地理交通と周辺の人々の様子の一端を記録した。彼が景德鎮に到着するまでの経路も含め、詳細に当時の交通事情を述べている。その経路は上海から景德鎮の河口までの間の経路であるが、逆に考えると景德鎮製品の運輸経路とも言える。また藤江永幸が清国磁器産地を調査した「清国陶磁器産地視察報告書」には、景德鎮磁器生産に必要な粘土、燃料の柴などの資源の運輸方法を記録していた。農商務省技師であった北村弥一郎は、増減水季における景德鎮の水運の利用について詳しく記録している。さらに東亜同文会が編纂した清国経済状況を中心に調査した『支那経済全書』には、景德鎮の陶磁器製品の輸送の荷造費についても詳細に記録している。

これら日本の調査記録から清末中国の磁器生産の中心地である景德鎮の交通状況と製品輸送の経路や方法が明らかにすることができる。上海の『申報』に掲載された1920年代の中国の景德鎮調査記や、1950年代の江西省軽工業庁陶磁研究所の『景德鎮陶磁史稿』に見える昌江や水路運輸の記録から見ても、明治期の日本人の景德鎮の地理と製品輸送に関する調査記録は、中国の記録には見られない詳細で有用な記録と言えるであろう。